「塩で味付けされた言葉」　　2019年03月19日

コロサイの信徒への手紙4章2節～6節　目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい。同時にわたしたちのためにも祈ってください。神が御言葉のために門を開いてくださり、わたしたちがキリストの秘められた計画を語ることができるように。このために、わたしは牢につながれています。わたしがしかるべく語って、この計画を明らかにできるように祈ってください。時をよく用い、外部の人に対して賢くふるまいなさい。いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。そうすれば、一人一人にどう答えるべきかが分かるでしょう。

「著者」は、勧告の結びの言葉として「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい。」と書いている。「目を覚まして」は、主イエスがマルコ福音書13章32節、33節で、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。」と言われた言葉と同じである。終末の全き救いを待ち望み、感謝を込めて、ひたすら祈りながら、冷静に備えをなして生きるのがキリスト者の「今」である。

その祈りに、「著者」は、神が門戸を開かれ、秘められたキリストの計画である福音宣教のために、「著者」たちが、十分に語ることができるようにという祈りを加えてほしいと訴えている。祈り、祈られる中で、福音は宣べ伝えられていくのである。キリストの秘められた計画とは異邦人の救いである。「著者」は、福音宣教のために捕らわれ、牢につながれていると語っている。ローマ帝国は皇帝を「主」と仰ぐことを求めていた。植民都市においては、なおさらであった。その中で、ナザレのイエスを「主」と宣教したので、咎められ、投獄されることがしばしばあった。しかし、キリストの福音を知らされた者たちは堂々とイエスを「主」と告白し、「わたしがしかるべく語って、この計画を明らかにできるように祈ってください」と願っているように、宣教を続けた。

彼らの福音宣教は福音を知らない異邦の人々に語りかけることである。「時をよく用い、外部の人に対して賢くふるまいなさい。いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」と、「著者」は、時を上手に利用して、彼らに賢く振る舞うように忠告している。外部の人々の信頼を得るために、「いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」と言っている。主イエスは、「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう（マタイ5：12）」、また、「自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい(マルコ9：50c)」と語っておられる。塩は腐敗を防ぎ、他の食料のうま味を引き出す。塩を自分の内に持ち、その塩で味付けされた快い言葉を用い、外部の人々と平和を築くならば、どのように対応すべきかが分かって来ると言う。

Ⅱテモテ4章2節に、「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。」5節には、「しかしあなたは、どんな場合にも身を慎み、苦しみを耐え忍び、福音宣教者の仕事に励み、自分の務めを果たしなさい」と書かれている。彼らは、全ての時を神が関わる「カイロス」として、全力で宣教に邁進した。キリストの福音の確かさと救われた喜びが彼らを宣教に押し出したからである。